COMMITTEE for CHILDREN JAPAN

10年のあゆみ

―創立10周年記念誌―

NPO法人　日本こどものための委員会

発刊の挨拶

■理事長　渡辺 俊一

こうして創立10周年を迎えられたのは、会員はじめ関係者の皆さまのご理解とご努力の結果です。ありがたいことです。

日本中の子どもたちが呻いているなか、「セカンドステップ」は数少ない有効な教育プログラムとして、教育関係者・マスコミ・一般市民の高い評価をえています。研修会は全国各地で開催され、教材は今年「コース5」までが出版頒布されるなど、本会の活動は順調に成長しています。しかしそれだけ、現実問題は深刻であると、身を引き締める思いでもあります。

NPOの生命は、使命感と技術力です。私たちは、次世代を担う子ども達がソーシャル・エモーショナルに健全に成長することを願い、自ら汗を流す市民集団です。同時に、専門領域としてのSEL技術を日本に根づけようとする技術集団でもあります。市民活動のボランタリズムと、専門技術のプロフェッショナリズムとを、いかに両立させるかが問われているのです。

創立10年を機に、さらに強力に活動を展開します。親子塾をはじめとする会員の全国ネット化、公教育への進出、SEL学会の設立支援、アジア近隣諸国へのセカンドステップ普及支援など、「新しい公共」をつくりだします。一言でいえば、日本NPO界で超一流の市民活動団体をめざすのです。われわれの手で社会変革の歴史の歯車を、前へ向かって回そうではありませんか。そう、その音が聞こえるでしょう。

■副理事長　金子 義男

悩みや苦しみを抱える高校生と向き合うカウンセラーとして、非力さ無力さを感じ、有効な解決策を探し求めていたとき、運命的に出あったプログラムがセカンドステップでした、と渡辺紀久子理事が述懐しておられる。

この出会いが、NPO法人「日本こどものための委員会」を立ち上げて、日本にセカンドステップを紹介する機会となりました。

活動について、ときに不備や困難がありましたが、この10年、出会いの活力は衰えることはなく、さらなる展開に意欲を燃やしているところです。

■CFC事務局長　Joan Cole Duffell

シアトルの小学校で、セカンドステップに初めて触れて以来、渡辺紀久子さんは、私たちの教育方法を日本へ持ちかえり、子どもたちが、より思いやり深く、よりうまく問題を解決し、より力づよい市民となるよう、たゆまず努力してきました。2001年の創立以来、貴会は、セカンドステップ教材を日本の子どもたちへ届けるにあたって、教材の一体性を損なうことなく、文化の相違に細心の注意をはらう、という基本理念をしっかり守ってきました。私たちCFCは、同労者である貴会のみなさんの、知的で思慮ぶかく献身的な働きに対して、おおいに感謝し、誇りに思っております。貴会のみなさん、10年間の素晴らしいお働き、本当におめでとうございます！

Since that day when Mrs. Kikuko Watanabe first observed a Second Step lesson in a Seattle classroom, she carried the desire and commitment to return to Japan and share our methods for teaching children to be kinder, more effective problem-solvers, and stronger citizens.

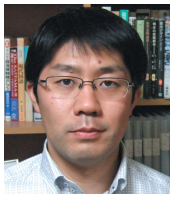
And, from its founding in 2001, CFCJ never wavered from that vision：to bring the Sekando Suteppu program to the children of Japan with great care for program integrity and cultural sensitivity. We at CFC have always been deeply grateful for and honored by the intelligent, thoughtful, and dedicated work of our partners at CFCJ.

Congratulations to all at CFCJ for ten successful years！

10周年を迎えて

■理事　**木村　秀**

セカンドステップが日本に広がって10年が過ぎ、教育、児童福祉をはじめとして、たくさんの分野に広まってきました。次の10年は、さらに広まっていくだけでなく、こども達の間にセカンドステップが着実に根付いていってほしいなと思います。



■理事　**後藤　純**

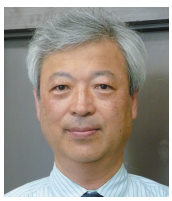
セカンドステップは、皆様の活動エネルギーによって育てていくとともに、皆様の活動もレベルアップしていくことが重要です。地域社会での活動では資金不足、人手不足、行政との関係など悩みも多いと思いますが、一つ一つ一緒に解決していきましょう。

■理事　**小山　望**

障がいをもつ子どもと、もたない子どもがいっしょに学ぶ、インクルージョン教育を促進するためには、セカンドステップを取り入れた教育が必要と考えます。「みんなちがって、みんないい」。

■理事　**所澤 保孝**

最初は、幼稚園や保育園、児童養護施設等の関係者が中心でしたが、10年間で小学校や親子塾の関係者、教員を志す学生達にも普及し、子どもの社会性・情緒の育成では、最もよく知られた全国的教育プログラムに成長しました。出会ってよかったセカンドステップです。



■理事　**宮崎　昭**

品川区における効果研究から、セカンドステップが科学的に効果のあるプログラムであることが実証できました。背景理論の「社会性と情動の学習」SEL(Social-Emotional Learning)は、一般の会社や世界の国家間の多様性の問題を解決する大きな力になると感じ、その研究を進めていこうと思います。

■理事　**渡辺 紀久子**

いちばん嬉しいことは、多くの虐待された子どもが暮らす児童養護施設でセカンドステップが使われていることです。虐待された女生徒との出会いが、このプログラムを探すキッカケとなったのですから。もうこれ以上、連鎖反応が起こらないことを心から願っています。

■監事　**井部 文哉**

渡辺理事長夫妻と初めて逢ったのが2002年8月20日、吉祥寺の本町コミセンでした。東京学芸大名誉教授の辰見敏夫先生から「子育てのNPOを手伝ってやってくれ」ということで、以後、初期の研修会で暴力の講義をしたりしているうちに、もう9年近く経ったのですね。

■監事　**黒田 隆之**

私の妻は1983年から、ヤマハ音楽教室で毎年数百人の児童が音楽に親しむ手伝いを、25年間、時給が1円も昇給しないまま続けました。妻曰く「入校前ヨチヨチ歩きの児童が、2年後1,000人の前で立派にピアノを弾いて拍手を受けると、感動して給料への不満なんぞ忘れるわ！」と。本会の子ども達にも同じ愛情を持てるよう、私も成長せねば。

10周年記念座談会／指導講師編

親と子が共に成長できるセカンドステップ

2011年2月6日開催

宮崎 昭

山形大学 教職研究総合センター教授
本会理事・指導講師会会長

渡辺 紀久子

認定心理士、保護司
本会理事

村川 京子

大阪薫英女子短期大学児童教育学科 准教授

金子 歌子

若木保育園（神奈川県秦野市）
副園長

石川 芳子

学校心理士
東京成徳大学 子ども学部講師

木村 秀

臨床心理士
東京都勝山学園 心理技術員
本会理事・専任指導講師

日本こどものための委員会の10周年記念に際して、指導講師が集まり、この10年間を振り返りつつ、これからの10年についても率直な意見交換が行われました。

セカンドステップの魅力

●宮崎　最初にセカンドステップの魅力について話していきたいと思います。日本でもソーシャル・スキル・トレーニングは盛んですが、日本のプログラムは、行動を教えるものです。朝は「おはようございます」と言うという行動を教える。しかし、友達が愉快な気持ちでいるのか、沈み込んでいるのか、それに合わせて静かに小さく「おはようございます」と言ったほうがいいのか、元

気づけるように「おはようございます」と言ったほうがいいのかは、教えていないんですね。セカンドステップでは、その部分をかなり重要な要素として扱っている。私は、そこが魅力だと思っています。

●渡辺　私が初めてセカンドステップに出会ったのは、今から15年前になります。アメリカの子どもたちが、セカンドステップから学んだスキルを生かして、行動しているということがよく分かりましたね。ある学校のレッスンで、先生がギプスをはめて、足を引きずるようにして歩いていたときに、子どもたちが、「先生、足、大丈夫？痛くない？」という思いやりの気持ちを表す。そういう子どもたちの姿を見て、セカンドステップの影響は大きいなと思いました。翻訳権をとり、翻訳を進めるにつれてこの良さが本当によく分かり、不登校とか引きこもりとかの問題解決に役立つのではと思ったのです。今は、子どもたちがセカンドステップを学ぶことで、現実に変化してきているという点がとてもうれしいです。

●金子　私は保育園を経営しています。誰もが保育には「質」を求めているんですね。でも、保育士自身の育ってきた環境や育てられ方が、保育に反映されてしまい、なかなか教育の本質を身に付けてこないという問題にぶつかっていました。悪いことをしたらお尻をぶったり、廊下に立たせたりというのではなく、「裁かない保育」「大人の愛が伝わる保育」を実践したいと試行錯誤してきました。しかし理念だけでは具体性に欠け、行き詰まった時代がありましたが、そのとき、新聞でセカンドステップ研修会の記事を見て、これなら今の問題を打開できるんじゃないかと思い、第1回目の研修会に職員4名とともに参加しました。

　セカンドステップの魅力は、子どもの幸せを願う大人のために開発されたプログラムであることです。「大人の保育士が変わらなければ保育なんてできない」という、私が求めていたものに出会い、助けになりました。セカンドステップを実践していくと、大人よりも先に子どもたちが変わる。そして、大人も変わってきます。小さな純粋な子どもたちが、父母や地域を動かして、大人の意識や行動も変えていくんだという思いがあります。

●村川　私のいちばん好きなフレーズは、「それも一つの考えだね」という言葉です。この言葉を子どもに向けると、金子先生が言われたように裁かなくてすみます。「そういう考え方があるものね」って言えるし、「ああ、そういうふうに考えたんだね」って言うことで、子どもの気持ちを受け止めることができます。これは、幼児から大学生まで「あなたは、そういうふうに考えたのね」という気持ちで受け止めることができて、自分の中に落ち着きとか、自由な気持ちとかをもたらせてくれるものだというふうに思っています。セカンドステップの魅力は、子どもから、子どもの気持ちを、子どもの言葉でダイレクトに聴いていけるということに尽きると思うんです。レッスンの中で対話をしながら楽しくならないときはない、という感じです。それが魅力です。

●石川　セカンドステップは、「気持ち」に焦点を当てているところが評価できます。今までは、とにかく「行動」に目がいってしまうんです。行動を見ただけで、「何でこんなことするの！」と、子どもを叱る。しかし、その子がなぜそういう行動をしたのかという、子どもの気持ちに焦点を当てる必要があるんです。気持ちに焦点を当てることで、子どもも、気持ちを受け止められたと思います。先生も保護者も叱らなくて済むという場面がすごく増えてくると思います。そこがセカンドステップの魅力ですね。

　また「落ち着く」というステップがあることで

す。発達障害を持った子がクラスにいたときに、その子がお友達のことでトラブルがあったんです。そうしたら、その子は「こんなときどうする」という紙芝居を作ってきて、幾つか解決法を紙芝居風にしてきました。それを朝の会でみんなの前で「ちょっと見せて」と言って、やってもらったことが印象に残っています。

また、同じ子なんですが、進級した先で友達同士のトラブルがあったときに、「セカンドステップでは、落ち着くときに深呼吸したり、数を数えるんだよ」と言って、ほかの子に教えていたと、他の先生から話を聞きました。セカンドステップが子どもたちの中で浸透しているというのを実感しました。

●木村　私は児童養護施設で仕事をしています。セカンドステップは、虐待された子どものトラウマのケアという部分で有効なプログラムだと思います。自分の気持ちや自分自身を大事にされたことがない子にとって、「あなたはどんな気持ちなの？」とか、「どうしたかったの？」といった、まず気持ちを大事にしてくれるところが良いですね。施設内で暴力を振るったりする子に対して「駄目じゃない」という言葉だけでは何も変わらないんですね。暴力の代わりにどんなふうにしたらいいの、ということを教えてあげる必要がある。「駄目だ」だけでは子どもは我慢していかなければならない。そうではなく、例えば、物を取られたら「返して」とか、「それは嫌なんだよ」と気持ちを伝えて問題解決するということが大切なんです。セカンドステップを学べば、自分はきちんと解決できるんだ、という自信がつきます。

●渡辺　けんかが起こるというのはどこでも日常茶飯事なんですね。私がセカンドステップで、いちばん好きなものは、「アイ・メッセージ」なんです。誰も「アイ・メッセージ」は人を傷つけないで、自分の言葉を相手に伝えることができます。それが魅力だと感じます。

●村川　セカンドステップには、そういう技法がさりげなく、しっかりと組み込まれていますね。だから幼児にそれを伝えることができます。いちばん幼い子どもたちに、言葉を使って表現していくことを教えていく。その着眼点は本当に大事なことだなと思うんですね。本当に人として大事なことを楽しみながら、喜びながら伝えていく。それを芯にして、幼児教育や初等教育の場で活かそうとしています。

親子で成長できるプログラム

●宮崎　発達障害のグループを担当しているのですが、子どもだけに教えるんじゃ、なかなか長期的な変化が難しい。むしろ親子で覚えていくというのが重要ではないかなという気がしています。そういう意味では、本会が世界で初めて始めた「親子塾」はとても興味深いプログラムです。今後は、たくさんの人に参加してもらい、そのやり方や効果をもっと検証していこうと思います。この記事を読まれた親御さんは、子どもだけではなくて、自分のためにも参加していただけるといいんじゃないか、と思っています。

●金子　私の孫は「おばあちゃんは自分の気持ちばっかり言うね」って言うんです。そして、「僕の気持ちだってあるんだよ」と言うんです。だから、「そうよ。だからあなたの気持ちも言ってちょうだい」というやりとりをよくします。また、このまえ保育園にお迎えにきたときに、うちの孫が同じセカンドステップを学んだお友達に「遊んでくれてありがとう」って帰っていったそうです。セカンドステップをやっている子どもは、自分の気持ちを出せるようになっているなと分かり

ます。

親子塾を経験すると、学校でも「とても変わりましたね、落ち着きましたね」と先生から言われるそうです。自分の気持ちを大事にするとか、されるとか、自分の意見を言ってもいいんだなということを学び、「とてもうちの子は自信をつけたようです」って、お母さんが喜んでいます。

●石川　親子が一緒に学べるということが、いちばんいいなと思っています。私は小学校教師のときに、授業参観や学校公開のときに、あえてセカンドステップの授業を公開するようにしました。これを見られた保護者から、「親もすごく学ぶことが多くて、自分を振り返ることができた」という感想を頂くんです。ところが、それが単発で終わってしまうんですね。

このプログラムは体系的なプログラムなので、やはり最初から親子で学べるということが、いちばんいいのかなって思います。子どもたちが家に帰って、学んだことを実践した際に、親がそのことを知っていて受け止めると、フィードバックが全然違いますから。親子塾が全国に展開していけるようになるのがいいかなって思っております。

●木村　親から子どもに、なんとなくでもニュアンスで伝わる部分ってあるんですね。だけど僕が児童養護施設で関わる子どもは、そういう家庭的な文化が崩れているんです。そして、今は普通の家庭でもそれが崩れてきている。だからこそ、セカンドステップを学校教育の中で実践してもらう必要があると思います。

思春期、青年期のためのプログラムを含めた、これからの取り組み

●宮崎　いま要望が多いのは、中高生のためのプログラムです。NHKでも「引きこもり」の特集をやっていましたけれど、やはり思春期から青年期、そして就労まで満足いくワークライフバランスというようなことを言われています。そういった部分でのプログラムに、どうしても取り組みたいですね。

●渡辺　コース4には、「盗みたくなったとき」とか、「失望したとき」とか、それから「うそをつきたくなったとき」、そんなレッスンがあります。とても実際的で、これは中学生、高校生でも使えるものではないかと思います。

たとえば短期的な得と、長期的な得、どっちを取るかということで、それを比べさせたりして、レッスンしていくわけです。これは中学に使えると思います。またコース5になると、いじめに遭ったときどうするか、というのがあります。

●木村　中学のスクールカウンセラーをやっていて思うのは、対人関係の問題です。本人は「いじめられた」と言う、でも、周りは「そんなこと言ってないよ」と言う。そういうところのトラブルってとても多くて、対人関係の問題が中学校のところでやっぱり出やすいとは思うんです。でも、そういう中でうまくやれている子には、幼少期の積み重ねというところも結構あります。

また、その子自身が学ぶだけでなくて、その周りの子たちも「やっぱりいじめ、良くないよね」とか、「相手の気持ちをお互いに考えようよね」という、集団の中でセカンドステップが取り込まれていると、その集団がお互いに高めあえるような、いい集団になるなと感じています。

●金子　私は、地域の幼稚園・保育園に働きかけて、職員研修につなげていきたいですね。教育委員会の担当者が来て、「必要なのは、これなんですよ！」と言って、子どもたちのレッスンを見て感動して帰ったんですけど、それっきりでした(笑)。ですから、これからは、公民館や保育園を

活用して、地域社会に働きかけていきたいと思っています。

●石川　発達障害の子たちというのがやはり小学校の中でも結構インクルーシブ教育ということで、関わっていかざるを得ない状況になっています。セカンドステップのプログラムは、写真1枚でもやっていけます。これからは、より効果的に子どもたちにインプットできるような形のものを、フラッシュカードとかいろいろなものを工夫していきたいんです。それから、どういうところにこのプログラムの効果があるのかという、科学的な実証研究というのが必要じゃないかなと思います。

●宮崎　普及という点では、いずれは“セカンドステップfor iPad”とかができると、意外と急激に普及するのではないかなと思っています。文部科学省でも今、電子教科書、iPadとかいったメディアに載る教科書を開発しています。ITツールに載せていくのは、ひとつの戦略かなと思っているところです。

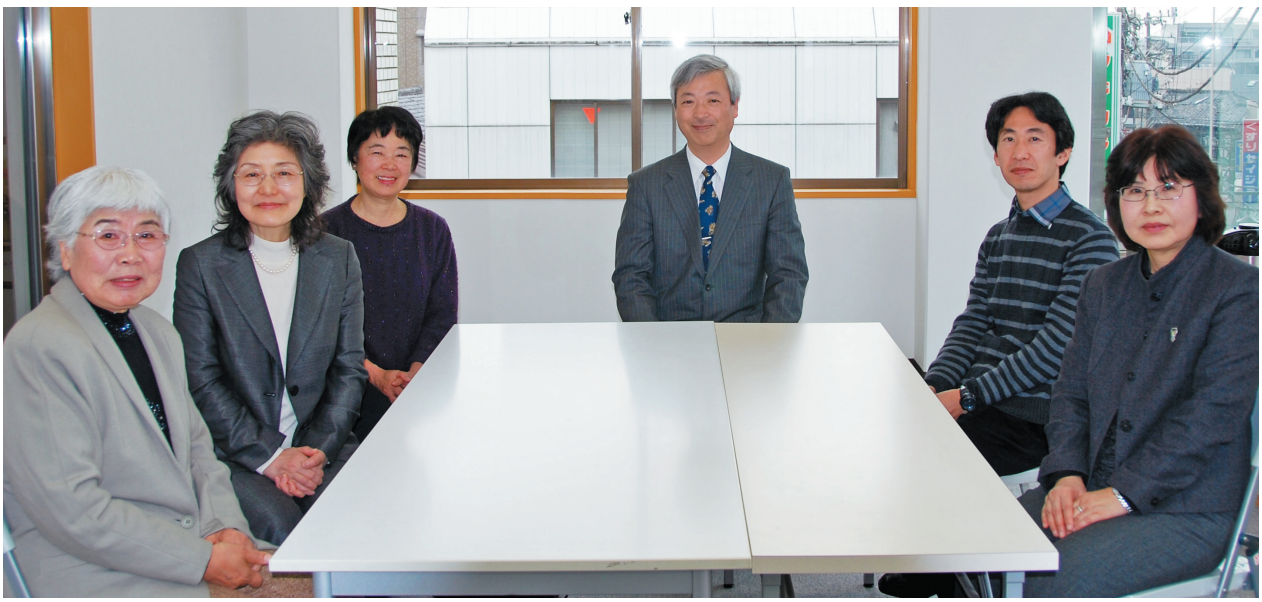
●村川　セカンドステップの実践が、なかなか上手くいかないとかで悩まれたり、すごく上手になってからやらないといけない、と思っていらっしゃる方がいるみたいなんです。やっぱり地道にやっていくことが大切なのではないでしょうか。

ロールプレイが難しいといいますが、とにかく子どもはとても喜びますから、何でもないことですよ。上手も下手もないんですよ。面白い教材ですから、とにかく全28回楽しみながら、やり通していただきたいと思っております。

●石川　セカンドステップをやり始めると、子どもたちは大好きになって、「次は何？」と言うくらいに楽しみにするんですね。なので、ぜひ自信を持って広げていただき、やり続けてほしいなと思っています。

●木村　本当に実践あるのみです。実践してもらえれば、失敗しようと、成功しようと、子どもにとってちゃんと伝わるところは伝わります。やるほうだって、こういうふうに子どもに関わればいいのかなという部分で、振り返るとか考えるきっかけになると思うんですね。

大人は最初から親になっているわけじゃなくて、だんだん親になっていくもの、このプログラムだって同じで、ともに成長していけばいいと思うんですよね。



日本こどものための委員会
小 史

本会理事長　**渡辺 俊一**

1 「セカンドステップ」との出会い 1996年

「セカンドステップ」と初めて出会ったのは、渡辺紀久子（本会理事、指導講師。以下「渡辺紀」）が、米国シアトル市に1カ月ほど夫と滞在した、**1996年**3月中旬のことです。

彼女は、都内でも問題が多いとされた高校で、23年間カウンセラーをつとめていましたが、ある女生徒が「私は、生まれるべきではなかったんです」とポツリと言った言葉が忘れられませんでした。その一言が、渡辺紀の心の中で生きつづけ、セカンドステップという教育プログラムとの出会いへ導いたのかもしれません。

「アメリカの学校では、対人関係をうまく結べない子どもに、どんな指導をしているのだろう」と、渡辺紀はバスを乗り継ぎながら、シアトル市内の小・中・高校など13校を見てまわりました。

いよいよ明日は帰国という日、アダムズ小学校で、彼女は興味深い授業に出会いました。先生と生徒が対話をしながらレッスンを進め、そこで学んだことを子どもたちがロールプレイで実演するという授業です。その先生は、足をけがしてギプスをしていました。レッスンが終わり、渡辺紀が一緒に廊下を歩いていると、1年生の子どもたちが先生に次々と声をかけてきます。「先生、足はいたくない？」「大丈夫なの？」

小学1年生でも、相手を思いやる気持ちを自然に表現できることに、渡辺紀はとても感動しました。これが、ワシントン大学のジェニファー・ジェームズ教授が設立したCommittee for Children（以下「CFC」）の「セカンドステップ」でした（後に2001年、連邦政府から最優秀プログラムと表彰されました）。

2 日本への導入を模索 1996～2000年

この教育プログラムは「対人関係をうまく結べない子どもに役立つのではないか」と直感した渡辺紀は、半年後に再び渡米し、セカンドステップの教材を入手しました。帰国後、翻訳を進めていくにつれ、このプログラムが、子どもの虐待ばかりでなく、暴力・不登校・いじめなど「日本の学校が抱えている多くの問題を解決する手がかりになる」という確信をますます深め、日本への導入を真剣に考えました。

「すぐにでも、日本でセカンドステップを実践したい」と考えた渡辺紀は、翻訳した教材の出版の許可を求めて、翌**1997年**10月CFCへ手紙を書きました。ただちにジョアン・ダッフェル女史（当時部長）から返事があり、「契約は、試行実践をしてもらった後で、出版・訓練の両方ができる団体と結ぶ」という好意的ではあるが、厳しいものでした。

渡辺紀の前には、団体と試行実践という、2重の厚い壁が立ちはだかりました。いかにセカンドステップへの熱意に燃えているとはいえ、彼女はごく普

セカンドステップに出会ったアダムズ小学校
（シアトル市）

セカンドステップ「コース1」教材

通のひとりの主婦にすぎないことを痛感しました。どの団体へお願いしようか、ほうぼうに話をかけているうちに、翌1998年2月、ある既存団体（以下「団体」）の有志2名が「やりましょう」と言ってきました。「出版と訓練を一体的にやれるか」という渡辺紀に対して「分かりました」とのことでした。

すでに翻訳した「小学1～3年用」教材を見せたところ、「日本では小学校へ食い込むのが難しいから、まず保育園・幼稚園へ向けて『就学前用』（のちの日本版「コース1」）から出版しよう」と言われ、その翻訳を進めながら定期的に勉強会を重ねました。半年後、ようやくレッスンの試行実践をできるまでになりました。

そのためには予備契約が必要です。そこで渡辺紀は、同年10月、CFCのマイケル・オーチ事務局長との間で著作権使用の個人契約を結びました。2カ月後、渡辺紀はシアトルへ行き、CFCのセカンドステップ研修会を受講します。最初の手紙以来、今日に至るまで親友となっているダッフェル女史は後日、渡辺紀に言いました。「あなたはホントに、決してあきらめない人ですね」と。

翌**1999年**、渡辺紀は勉強会の傍ら、試行実践の場を探し始めます。あちこち20カ所に断られたあげく、やっと地元の幼稚園のOKをえて、同年7月からに半年間、子どもたちを前に初めてレッスンをしてみました。子どもたちが園庭でケンカを始めると、他の子が「落ち着いて」と言うなど、すぐにスキルを使い始めたのにビックリしました。

この年うれしいことに、セカンドステップが、初めて日本の新聞に載りました。1999年5月9日の日経新聞「『キレない子』幼児教育で」の記事です。これは渡辺紀らの動きとは無関係だったのですが、続いて6月30日号のニューズウィーク誌が渡辺紀に取材後「キレない子供を育てる」と3頁にわたり報道してくれました。その記事を見て連絡してくる人たちがあり、またこちらから協力をもとめて訪問した人もありました。こうして、以前からの加藤祥子（牧師）のほか、河村真理子（幼稚園経営者）や楡木満生（大学教授）と交わりの輪が広がりました。しかし翌**2000年**10月、予定していた団体からは「出版と訓練を一体的にやれなくなった」と致命的なことを告げられました。

3 NPO法人へ向けて 2000～2001年

このようななかで、最初のシアトル行き以来、渡辺紀の翻訳や交渉の相談にのっていた夫の渡辺俊一（以下「渡辺俊」）は、「そんなにやりたいのなら、既存の団体に頼らないで、自分でNPO法人を立ち上げてはどうか」と示唆しました。本人は、都市計画・まちづくりの大学教授で、1998年NPO法の制定以降の動きを熟知していたからです。

こうして新たな途をあゆみはじめた渡辺紀は、この間に知りあった加藤・楡木・河村らと、2000年11月、お茶の水女子大学で第1回会合をもち、皆で会の名前を「『日本こどものための委員会』法人設立準備会」と定めました。新たに原田いず美（市民活動家）、渡邉一司（税理士。以下「渡邉一」）、江口美代子（児童相談所職員）、佐藤秋子（大学教員）らが加わり、楡木教授は自身の研究室を毎週1回のペースで提供しました。定款原案は渡邉一が法律知識を活かしてまとめました。当初の設立会員は14

セカンドステップの新聞記事

ダッフェル女史初来日（前列左から渡辺紀、ダッフェル、楡木）（2000年）

名で、役員の構成は、楡木理事長、渡辺紀副理事長、河村・原田が理事、渡邉一・渡辺俊が監事となりました。こうして同年12月、東京都へNPO法人設立の認証申請を出したのです。

21世紀となった翌**2001年**2月、会を支援するためダッフェル女史が来日し、契約を含む話しあいの機会をもちました。これも含めて、この年CFCからは3回・延べ4人が東京へ来ることになるのです。CFCのこの好意は、本会設立の歴史に長く書き残しておくべきでしょう。

4 「日本こどものための委員会」の船出 2001年

2001年4月13日「NPO法人 日本こどものための委員会」は東京都から認証をうけました。同20日に法人登記を終え、本会は**第1期**（～同年8月）をスタートします（以降、この日を創立記念日としています）。設立の**臨時総会**（5月10日）を経て、6月には、CFCのオーチ、ダッフェル両氏がシアトルから駆けつけて「設立記念式典」に出席し、本会と正式契約にサインしました。

船出はしたものの、最初の体制は「ないないづくし」の状況でした。活動の焦点は、まず教材を翻訳・出版し、その使い方の研修会を開いて、セカンドステップ実践者を世に送り出すことでした。しかし教材も講師も受講者も会場も、何もありません。お金がないので、助成金をあちこち申し込みましたが、実績のない本会は不採用の連続でした。会の財産は、数人の中核メンバーの熱意とアイデアだけでした。第1回理事会（2001年5月）から、さっそく組織づくり、ルールづくりに着手します。

まず形ばかりの事務局をつくり、渡辺紀が事務局長を兼ねました。とりあえず世田谷区の渡辺宅、彼女の4畳の書斎に割込みました。「バーチャル事務局」と称して、メンバーは、家庭用電話や私用メールを使い、会議は外部の会場を借りました。経理処理は、渡邉一が有料で引き受けてくれました。

次に研修会の講師を養成することになり、同年8月上旬、CFC講師のレネ・マカミングズ女史を東京へ招き、2日間にわたる講習と審査を経て、河村・楡木・原田・渡辺紀の4理事を資格者と定めました。こうして第1回の研修会は、8月18～19日（前半）、10月20～21日（後半）、合計4日間にわたり東京で行いました。講師は主に原田がつとめ、約60名の受講者がありました。初めての慣れない研修会は、かなりの混乱をうみ、今後に課題を残しました（以後の研修会は2日間の日程となります）。

研修会での受講者が、それぞれの現場での経験を共有できるよう、12月に会報（ニュースレター）を発刊しました（当初は年2回刊でしたが、2005年9月から季刊となりました）。

教材については、渡辺紀が荒訳したアメリカの「就学前用」に有志が手をいれ、原田が最終チェックして、日本版「コース1」として、かろうじて10月の研修会直前に出版の運びとなりました（以後、アメリカ版「小学1年用」は日本版「コース2」という対応関係になります）。

研修会については、他国にないユニークな制度にしました。本会は基本的に市民活動団体であるという大前提から「セカンドステップを実践するためには、まず会員になる必要がある」というルールを定めました。つまり「会員→教材購入→研修会受講→実践」という一

創立記念式典（前列左2人目から渡辺紀、オーチ、ダッフェル、楡木、渡辺俊、河村）（2000年）

研修会での講義風景（宮崎講師）（2007年）

連の流れです。教材購入だけでは実践できないし、会員でなければ受講できない、という原則なのです。この方式により、会員は年会費を支払う義務があり、本会は会員に技術サポートする義務がある、という互いに密接な関係を築くことになりました。

ところが最初の5カ月が過ぎ、**第2期**（2001年9月～）に入り、10月28日の第1回通常総会（以下「総会」）の直前、設立段階から大きな貢献をした楡木理事長が退任を申し出ました。そこで総会では急遽、11月から理事長は渡辺俊（以下「渡辺理事長」）、副理事長は渡辺紀から河村へ代わり、新たに麻生慎一郎（自営業）理事、加藤監事を加えることを決めました。麻生は、渡辺紀に代わり事務局長をその後約1年つとめます。

なお同年10月上旬、渡辺紀はCFCが主催するセカンドステップ国際会議へ出席のため、ハイデルベルクへ私費で飛びました。これは第2回の国際会議です。その後も本会は毎回、代表を送っています（最新は、2011年開催予定の第8回マンチェスター国際会議です）。

5 波乱をこえて 2002年

2002年は波乱の幕開けとなりました。本格的にセカンドステップの普及に取り組み、実際に会の運営がはじまると、思いもかけない問題が生じました。まず、運転資金がなくなりました。無名のNPO法人に融資する銀行はありません。同年1月に理事5名から各々30万円を借金することになりましたが、8月には無事返済しました。しかし、それ以上に深刻な問題が生じたのです。金銭原則をめぐる、路線対立です。

最初の研修会での受講料収入をめぐって、2つの考えが明確になってきました。一方は「中核メンバーで努力した者に、多くを配るべきだ」という考え方であり、他方は「基本的にボランティアに徹すべきだ」という考え方でした。理事会のたびに、ときには深夜におよんで真剣な話しあいが重ねられました。結果としては、改めてNPO法人である原点にたち「ボランティア精神に基づいてセカンドステップを広める途」を選択したのです。以来「理事・監事は無給」「講師等のプロは有給」という「ボランタリズムとプロフェショナリズムの調和」を基本方針として運営しています（その後、有給原則は事務局職員にも拡大されました）。

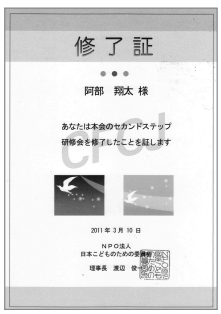
第3期（2002年9月～）に入り、第2回総会（同年10月）の直前、設立段階から教材・研修で大きな力となってきた河村・原田両理事が退任を申し出ました。その結果、理事会は5名中2名が欠員という異例の事態となりました。しかし総会では、金子義男（保育園経営者）と小山望（大学助教授）を後任の理事に選び、困難を乗り越えました。これを見届けるように、経理等の事務面で貢献してきた渡邉一監事が退任し、翌年3月、事務局長もつとめた麻生理事が退任しました。

なお2002年2月、最初の事務局員・田中亜紀の手で、インターネット上に本会のWEBを立ち上げました。また同年7月、最初の助成金として、愛恵福祉支援財団から30万円をえて、パソコンを買うことができました。

6 成長への制度設計 2003年

2003年は、発足期のいろいろな問題を乗り越え

研修会での実践演習風景（2008年）



研修会の修了証

て、次の成長へむけ新たな制度設計を試みる年となりました。

体制については、その前年から、外部の人材を活用する「ボランティア」や「特別班」の制度がスタートします。ボランティアには、企業経営者の黒田隆之・経営ボランティア（前年8月）と、シアトル在住の後藤浩・渉外ボランティア（同年11月）が就任しました。また特別班としては、前年8月「新プログラム検討班」（井部文哉主査）と「地方戦略検討班」（金子主査）、2003年1月「研修作業班」（金子主査）を設けました。いずれも特定のテーマについて考え、知恵を出してもらう仕掛けで、渡辺理事長が政府の顧問や審議会をイメージしてつくった制度です。結果はおおむね成功で、外部の優れた人材を本会幹部にリクルートする働きもしました。

事務局については、同年1月、今までの名目的な事務局長に代わり、溝渕雅章が「本当の」事務局長になりました。本人とはハーフタイムの契約でしたが、フルタイムに近い働きとなり、林さおり事務局員と事務局の基礎固めをしました。しかし他の事務局員をどうするかについてはなかなか名案がなく、その後も試行錯誤が続きます。同年7月「本当の」事務局が、東松原商店街の一角にある6畳一間のアパートに独立します。急な鉄製の階段をコトコト登ってゆく、狭く薄暗い一室（12㎡）でしたが、事務室をもてた喜びを皆で実感しました。

研修会については、研修作業班の金子主査を中心に渡辺紀・半田典子（医療接遇講師）らが打ち合わせを重ねました。懸案の講師不足への解決策として「CFCから講師をまねく研修会（通訳つき）」のアイデアを渡辺理事長が出し、また皆で、受講者を班分けして「ファシリテーター」をつける方式も考え出しました。こうして2003年3月、来日したローリー・ベーカー講師の東京研修会は好評だったので、再度5月にも東京で行い、さらに翌年は同氏（夫妻で来日）、翌々年はスティーブ・プランク講師を招き、いずれも東京・大阪で研修会を開きました。以降、金子主査は研修会に、また妻の金子歌子（現指導講師）はファシリテーターとして、ほぼ毎回出席して研修会の制度を固めました。

2003年4月には、新たに「資格審査委員会」（小山委員長）がスタートし、7月には「指導講師」5名を認定しました。また9月には、団体賛助会員第1号として、若木保育園が入会しました。

このような新しい試みにもかかわらず、第3回総会（同年10月）の決算では、深刻な事実が判明しました。今期は、研修会の回数も前期なみの3回にとどまり（うち2回はローリー講師）、正味財産増の前期までとは逆に、初めてマイナス成長へ転落したのです。やはり前期の波乱のため、研修会を自前でやれず、コスト高のCFC講師にたよったのが原因でした。なおこの総会では、金子義男副理事長、半田理事を選任し、監事は加藤から井部・黒田へ代わりました。

また、同年10月からメールマガジン「セカンドステップ通信」を月2回の配信サービスにするなど、広報の充実をはかりました。

7 やっと成長、そして大赤字 2004～2006年

第4期（2003年9月～）の最大の出来事は、**2004年**4月、㈱福祉医療機構の助成金（299.4万円）を

ベーカー講師の大阪研修会（2004年）

プランク講師を囲んで（前列左から渡辺理事長、金子、プランク）（2005年）

獲得したことです。テーマは「キレない子を育てる『セカンドステップ』親子塾事業」で、初めての大型助成金となりました。じつは前年度、セカンドステップ教材を翻訳・試行実践するというシナリオで申請したのですが「不採用」でした。「もっとパンチのきくテーマはないか」と1年間、知恵を絞った結果、渡辺理事長が思いついたのが、このアイデアです。本来の対象である子どもたちと一緒に、親たちも集めてセカンドステップを実践する方式で、以後「親子塾」は本会の最大の発明品のひとつとなりました。これを開発・指導するため、同年5月「子育て支援研究会」(小山委員長）を設立し、実際の親子塾を太田・代田・秦野の3カ所でスタートしました。

ますます活動が活発になり、手狭になった事務局は、同年6月、羽根木公園前の1LKマンション（30㎡）に転出しました。こんどはきれいで気持ちのいい部屋で、窓からは公園の緑が迫ってきます。お金のありがたさをしみじみ感じた時でした。

2004年8月、初の「経営戦略会議」を開催しました。以後、お盆と年末の休み時に理事会を兼ねて、タップリ長期・中期の経営を議論する会となりました。第4回総会（同年10月）での報告では、第4期は前期に比べて、研修会が3回から5回へと増え、年間収入も703万円から1,637万円へと急増し、正味財産も436万円の増加となりました。これで「やっと経営的には安心」といったところでした。

この間、政府系の助成金について、溝渕事務局長は苦労しつつ多くを学びました。領収書などの形式的整理のために、実質的に総収入の約1/3にあたる100万円分の人件費を消耗した感じです。ですから、本来業務である研修会でシッカリ稼げるならば、助成金には頼らないでゆこう、と判断しました。

第5期（2004年9月～）を特徴づけるのは、検討班の大活躍です。今までの総数15のうち、今期だけで7つの検討班がつくられました。主なもの2つについて一言します。

第1は**2005年**8月設置の「単行本編集班」（井部主査）で、セカンドステップについて分かりやすく説明した単行本を編集・出版するためです。3年半後の2009年1月に出版した単行本『キレない子どもを育てるセカンドステップ』（A5判127頁、定価1200円）は、研修会受講者へ無料で配るとともに、バラ売りもしました。これがなかなか好評で、販売も1,000部以上のロングセラーとなっています。

第2は同年5月の「公教育プログラム検討班」（宮崎主査）です。日本では、セカンドステップが公教育へ進出することは至難の業なのですが、東京都品川区の教育委員会の和氣正典主査（当時）から「是非とり入れたい」と話がありました（この背後には、本多映子指導講師の尽力がありました)。同区は、ユニークな「市民科」の枠内で、全38小学校で1・2年生に各10時限をセカンドステップに割り当て、3年計画で順次導入する計画です。これに対応するため、宮崎主査を中心に「コース1」の28レッスンを再編成するなど準備を整えました。

第6期（2005年9月～）の**2006年**8月、最初の研修会を開きました。区の方針とはいえ、強制的に「民間人」から教られることに、教諭たちはかなり強く抵抗の様子でしたが、その後はだんだん協力的になってゆきました。全国には1,700余の市区町村がありますが、「第2の品川」がまだ現れず、これは今後の課題となっています。

代田親子塾の参加者（2008年）

品川区台場小学校でのセカンドステップ授業風景（2007年）

なお、第5回総会（2005年10月）では、半田理事が退任し、所澤保孝（大学教授）に代わりました。

2006年4月23日、創立5周年記念式典を東京で祝いました。当日は、宮崎教授の講演のほか、高橋盛男（非会員）の指導で「聴いて！ 語って！ セカンドステップ」と題して、全員参加のワークショップを行いました。会場では、CFCマーク・クロフォード事務局長のビデオ画像の祝辞で大いに盛り上がりました。

こうして成長に気を良くしていた矢先、第6回総会（同年10月）の決算では、研修会が8回へと増えているのに、正味財産は216万円減の大赤字となりました。じつはこの赤字は前期からの続きなのですが、原因を調べてみると、業務の急激な膨張に対応できない体制が原因だったのです。地方の研修会へ派遣されるファシリテーターが増えたり、教材を買わない受講者が増えたり、という実態が明らかになりました。「研修会の支出が増える一方で、教材販売の収入が減る」、つまり「働けば働くほど赤字になる」体質だったのです。特に同年2～7月、渡辺理事長夫妻の台湾滞在のため、目配りが足りなくなったのが一因かもしれません。

8 改革から躍進へ 2006年～現在

第7期（2006年9月～）は改革の一年となりました。目標は、まず研修会の経費削減につとめ、受講者へ教材購買を義務づけることでした。ここで改めて確認したことは「本会の研修会はたんなる講演会ではなく、あくまでもセカンドステップ教材の使い方を伝授する場だ」という原則です。こうした中、同年12月、事務局の基礎を築いた溝渕事務局長が4年間の働きを終えて退任しました。渡辺理事長は事務局長臨時代理を兼ねて、さらに改革を進めました。

次に、5年前に出版した「コース1」に加えて、ほかの教材を出版することにしました。「コース4」（2006年10月）に続いて、「コース2」（2009年6月）、「コース3」（2010年6月）、「コース5」（2011年予定）が次々出版されました。翻訳作業には、井部、江口、佐藤、橘治利（指導講師）らがボランティアであたり、深夜まで議論を重ねました。なお「コース3」からは、ようやく翻訳者に謝金を払えるようになりました。

改革の成果は、1年後の第7回総会（**2007年**10月）の決算に現れました。研修会の回数は前期なみの8回でしたが、341万円の正味財産増をみたのです（以降、現在に至るまで黒字経営が続いています）。

増大する研修会の要望に応えて、会の技術水準を高めるため、指導講師陣の充実が急務となりました。そこで2006年10月「指導講師会」（宮崎会長・木村秀副会長）を立ち上げました。この会は、大学に例えると、理事会と別の「教授会」に相当するもので、本会の権力分散方針の一環でもあります。両氏は、第8回総会（2008年10月）で理事に選出されました。

第8期（2007年9月～）半ばの**2008年**4月、新たに「専任指導講師」と、全国へ講師を派遣する「受託研修会」とを制度化しました。最初の山口受託研修会（同年6月）を手始めに、木村専任指導講師が全国各地を飛びまわって研修会を開きました。その効果は**第9期**（2008年9月～）から顕著に現れ、第9回総会（2009年10月）の決算では、研修会回数は2年前に比べて倍増の16回となりました。なお、こ

セカンドステップ実践風景（渡辺紀）

ビリニュス（リトアニア）国際会議の参加者（2007年）

の総会で後藤純（現・東大研究員）が理事に選任されました。

技術面の施策はさらに続きます。セカンドステップの根底をなす「社会性と情動の学習」（Social Emotional Learning、以下「SEL」）の理解と普及も大切だ、ということになり、学術団体としての「SEL学会」を目指して、まず「SEL研究会」を立ち上げ、支援してゆくことになりました。このため、2008年12月「SEL研究会準備班」（宮崎主査）をつくり、翌**2009年**10月25日「第1回SEL研究会」を東京で開催しました（その後、毎年10月最終日曜日に開催しています）。

CFCとの間で2001年に交わされた契約は、5年後の2006年には期限切れのまま使われていました。そこで2007年5月から、渡辺理事長・黒田監事らによる2年間の交渉を経て、2009年3月に決着し、5月から5年期限での実施となりました。焦点のロイヤリティは、最後まで執拗にねばったのですが、従来の5％から一挙に約12％に上がりました。しかし本会は、それでも十分に耐えられる体質になった、という判断がありました。

ところで、拡大する活動を支える事務局体制は永年の懸案事項でした。2007年、渡辺理事長を中心に、本会の運営に関わる基本的な「ルールブック」を作成し、以後活用しています。また2008年1月には、再度の移転で東松原駅となりの田島ビル（50㎡）へ入居しました（2011年1月、さらにスペースを倍増しました）。

事務局のある田島ビル（2011年）

職員については、2009年4月、佐藤晶子部長を事務局の責任者にあて、初めてのフルタイム職員として大学新卒の阿部翔太事務局員を採用しました（現在の事務局員は、ほかに六車佐和子、森和美、石川芳子がいます）。これら職員の雇用関係をキッチリするため、**2010年**3月、「職員関係委員会」（渡辺委員長・黒田副委員長）をつくり、社労士の助けを借りながら同年10月、「就業規則」「賃金規定」を定めました。小さなNPO法人で、これだけの規定と賃金水準をもつのは珍しい、と言われました。

なお、上記の第9回総会では、学校関係者の便を図るため、事業年度を9～8月から4～3月に改める定款変更を決議しました。その結果、**第10期**（2009年9月～2010年3月）は異例の7カ月間となり、**第11期**（2010年4月～）からは、本会の「期」が世間の「年度」と一致することになりました。（第10回総会（2010年6月）からは、6月第3日曜日午前を総会に、午後を指導講師会にあてています。）

さて、思い返せば、2001年に産声をあげた本会は、**第12期**（2011年4月～）の**2011年**4月20日にちょうど10歳の誕生日を迎えることになります。この間、多くの方々に支えられ、幾多の課題を乗り越えてここまで成長したことを改めて感じます。今後は、日本国内での展開のほか、とくにアジア近隣諸国等へのセカンドステップ普及を支援することも視野に入れています。次なる10年も、健全な市民社会の原理にたち、日本一のNPOを目指して「子どもたちの幸せをつうじて、世界平和へ貢献する途」を探って成長し続けたい、と心から願っています。

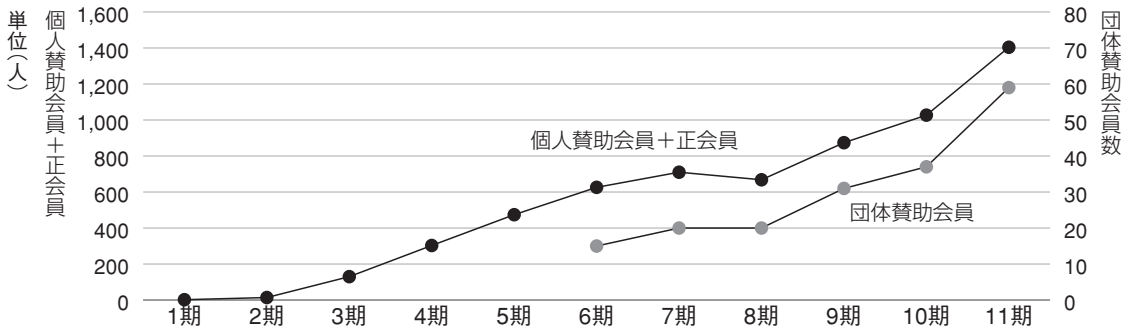
事務局の風景（左から六車、森、佐藤、阿部事務局員）（2011年）

年表

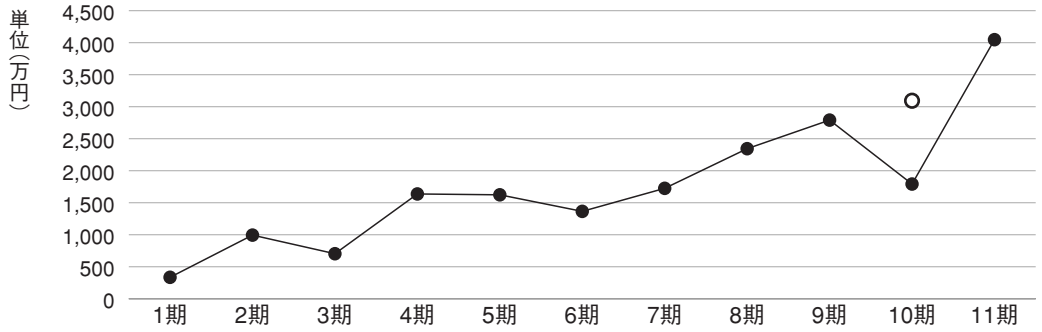
期	年月日	当会の動き
法人化以前 96.03～01.04.19	96.03.12	・渡辺紀久子、シアトル市内アダムズ小学校でセカンドステップと出会う
	98.10	・渡辺紀久子、CFCオーチ事務局長と著作権使用の個人契約
	99.05.09	・日経新聞朝刊「『キレない子』幼児教育で」（最初の新聞記事）
	99.06.30	・ニューズウィーク誌「キレない子供を育てる」（最初の取材雑誌記事）
	00.11.17	・「日本こどものための委員会」法人設立準備会、発足
	01.02.07－11	・CFCダッフェル女史来日、準備会メンバーと協議
第1期 01.04.20～01.08.31	01.04.20	・法人登記を完了
	01.05.10	・第1回臨時総会（設立会員14名）
	01.05.21	・第1回理事会（以下、理事会は略）
	01.06.16	・設立記念式典・特別講演会にオーチ、ダッフェル両氏来日、「2001年契約」に調印
	01.08.02－07	・CFC講師マカミングズ女史、来日し資格審査
	01.08.18－19	・第1回研修会（前半）
第2期 01.09.01～02.08.31	01.10.07－09	・ハイデルベルク国際会議へ渡辺紀久子が自費出席（以下、国際会議は略）
	01.10.20－21	・第1回研修会（後半）（以下、研修会(2日間)は略）
	01.10.20	・セカンドステップ教材「コース1」出版
	01.10.28	・第1回通常総会（以降、10月最終日曜日）
	01.12	・会報（ニュースレター）発刊（年2回刊、第6期より季刊）
	02.02	・ホームページ立ち上げ
	02.07	・㈶愛恵福祉支援財団より最初の助成金（30万円）
第3期 02.09.01～03.08.31	02.10.27	・第2回通常総会
	03.03.20－27	・CFCベーカー講師来日、講演会・研修会（東京）
	03.04.30－05.07	・CFCベーカー講師来日、研修会（東京）
	03.07.07	・事務局の事務所新設（中根アパート2階）
第4期 03.09.01～04.08.31	03.10.26	・第3回通常総会
	04.04－05.03	・㈱福祉医療機構の助成金（299.4万円）で親子塾事業発足
	04.06.01	・事務局の事務所移転（クレール東松原2階）
	04.07.30－08.10	・CFCベーカー講師（夫妻）来日、東京・大阪で研修会
	04.08.15	・最初の経営戦略会議（兼理事会）
第5期 04.09.01～05.08.31	04.10.22	・NPOアワード2004受賞（㈳東京青年会議所・東京海上火災保険㈱）
	04.10.31	・第4回通常総会
	05.07.27－08.08	・CFCプランク講師来日、東京・大阪で研修会
第6期 05.09.01～06.08.31	05.10.30	・第5回通常総会
	06.04.23	・創立5周年記念式典
	06.08.09－10	・最初の品川区向け研修会
第7期 06.09.01～07.08.31	06.09.01	・パートナーシップ事業発足
	06.10.01	・セカンドステップ教材「コース4」出版
	06.10.15	・指導講師会発足
	06.10.29	・第6回通常総会
第8期 07.09.01～08.08.31	07.01－02	・「ルールブック」完成（その後、適宜改定）
	07.10.28	・第7回通常総会
	08.01.28	・事務局の事務所移転（田島ビル3階東）
	08.04.01	・専任指導講師、受託研修会の両制度発足
	08.06.21－22	・最初の受託研修会（山口市）
第9期 08.09.01～09.08.31	08.10.26	・第8回通常総会
	09.01.01	・単行本『キレない子どもを育てるセカンドステップ』出版
	09.03.09	・CFCと「2009年契約」の交渉決着（ハワイ）。発効は5月1日（5年間）
	09.06.01	・セカンドステップ教材「コース2」出版
第10期 09.09.01～10.03.31	09.10.25	・第9回通常総会（午前）、第1回SEL研究会開催（以降、毎年10月最終日曜日午後）
	10.01.30	・台湾「セカンドステップ講演会」（最初の海外講演会）
第11期 10.04.01～11.03.31	10.06.01	・セカンドステップ教材「コース3」出版
	10.06.20	・第10回通常総会（午前）、指導講師会（午後）（以降、毎年6月第3日曜日）
	10.10.01	・就業規則・賃金規定を制定
	11.01.17	・事務局の事務所拡張（田島ビル3階西）
第12期 11.04.01～12.03.31	11.04.29	・創立10周年記念式典（予定）
	11.06.19	・第11回通常総会、指導講師会（予定）

成長の記録

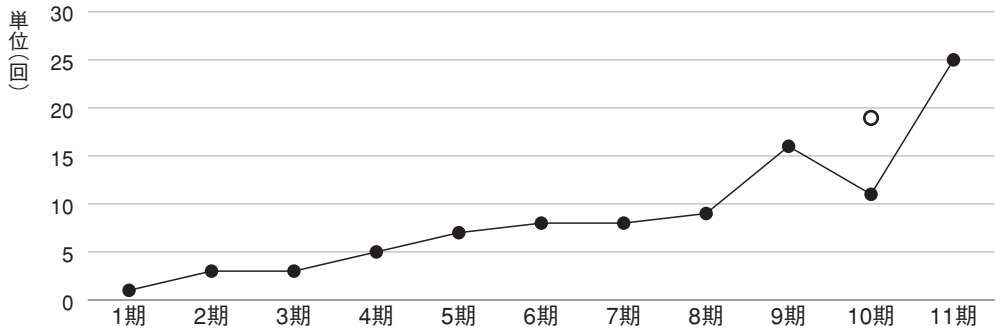
■ 会員数(期末)：期毎に100～140人のペースで、順調に増加しています。



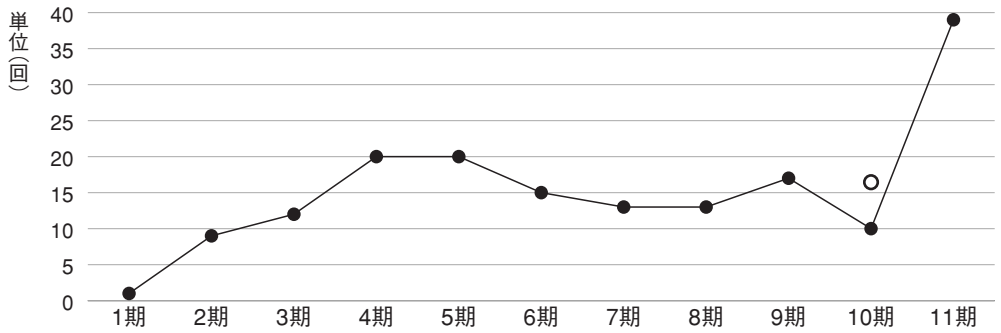
■ 収入合計：期毎に増減はありますが、近年順調に伸びています。



■ 研修会数：受託研修会のシステムが確立し、9期から研修会が急増しました。



■ 講演会数：事務局による申し込みフォーマットの工夫や認知度の高まりにより急増しています。



※10期は、会期変更により7カ月
※11期は見込み
○は12カ月に換算した場合の数

事業内容（2011年3月31日 現在）

どんな事業？	どんな内容？	どのくらい実施しているの？	どこで実施しているの？	主なお客さんは？
研修事業	セカンドステップ研修会	2010年度は24回実施しました。2011年度は25回くらいを予定しています。	東京（オリンピック・センター）・大阪など全国各地でやっています。 地方から依頼をうけ、講師を派遣しておこなう「受託研修会」もあります。	保育園・幼稚園・小中学の教諭・保護者など
出版事業	セカンドステップ教材	もっとも基礎的な「コース1」のほか「コース2」「コース3」「コース4」があります。2011年度は「コース5」を発売予定です。	世田谷の事務局です。場所は、井の頭線東松原駅となりです。（電話：03-5329-1461）	教材は研修会受講者のみに販売します。
	単行本	『キレない子どもを育てるセカンドステップ』		（単行本）どなたにも販売します（価格1,200円）。
関連事業	講演会	セカンドステップ講演会へ本会から講師を派遣します。2010年度は39回開きました。	全国各地からの依頼をうけて、講師を派遣しておこなっています。	セカンドステップに関心のある方なら、どなたでも結構です。
	親子塾	子どもと親とがいっしょにセカンドステップのレッスンを受ける場です。	代田(世田谷)、秦野(神奈川県)、横浜、名古屋で実施しています。見学したい方は、事務局で各親子塾を紹介します。	
広報事業	ニュースレター	本会の活動を会員へ送付する「季刊紙」です（送付数：約2,000通）。	世田谷の事務局です。	会員と準会員（団体賛助会員内で実践する方）
	メールマガジン	カレントな情報を隔週刊で送付する「メルマガ」です（送付数：約780通）。		

特別班等の記録（特定のテーマについて知恵を出す小組織（各種名称の特別班）と個人（ボランティア）です）

02.08.11　新プログラム検討班（井部文哉主査）、地方戦略検討班（金子義男主査）（共に～03.01.13）
03.01.13　新プログラム作業班（井部主査）、研修作業班（金子主査）（共に～06.10.15）
04.05.28　子育て支援研究会（小山望委員長）（～07.03.31）
04.09.01　ウーブンワード検討班（村川京子主査）、大阪会場検討班（田中淳子主査）（共に～04.12.31）
05.05.01　研究コンペ作業班（宮崎昭主査）（～07.03.31）、公教育プログラム検討班（宮崎主査）（～07.03.31）
05.08.13　単行本編集班（井部主査）（～06.09.30）、創立5周年記念行事検討班（黒田隆之主査）（～06.09.30）、リスペクト検討班（所澤保孝主査）（～07.03.31）
06.09.30　コース3翻訳班（松村香主査）（～07.02.17）
07.02.17　コース2翻訳班（宇津木孝正主査）（～07.08.31）、コース3出版班（渡辺紀久子主査）（～08.08.17）
08.12.28　SEL研究会準備班（宮崎主査）（～09.10.25）

02.08.16　経営ボランティア（03.01.19 経営アドバイザーに名称変更）黒田隆之（～05.10.31）
02.11.23　渉外ボランティア（03.01.19 渉外アドバイザーに名称変更）後藤浩（～05.10.31）

組織人事（2011年3月31日 現在）

●正会員

阿部 翔太　石川 芳子　井部 文哉　江口 美代子　小山 望　勝村 とも子　加藤 祥子　金子 歌子
金子 義男　木村 秀　黒田 隆之　後藤 純　佐藤 秋子　佐藤 晶子　島野 正子　竹田 文子
橘 治利　田中 淳子　田中 浩子　所澤 保孝　野中 敏博　林 さおり　本多 映子　マーシャル 理恵子
松澤 ひろみ　宮内 俊一　宮崎 昭　三好 布生加　六車 佐和子　村川 京子　米田 薫　渡辺 紀久子
渡辺 俊一

●団体賛助会員

わかぎ保育園　三美園　中里学園　大慈保育園　むつみ保育園　チャイルド園　高松ハイツ　さくら苑
鈴峰園　かがの保育園　神戸少年の町　あゆみの丘　君津児童相談所診断課　吉敷愛児園　共生希望の家
品川区教育委員会　みなみ幼稚園　四恩学園　静岡県児童相談所・施設　桜学館　添川小学校　あおぞら
弘済みらい・のぞみ園　愛聖保育所　西部保育所　国府保育所　久礼保育所　杉松会　轟保育園
飯山学園　泉佐野市教育委員会　岡山YMCA　ウィッシュサポート　あゆのこ保育園　山形大学
SOSこどもの村　尾瀬なでしこの会　神戸真生塾　岸和田学園　長野県児童相談所・県立関係施設
第2府中保育園　バウムハウス　溢愛館　能代感恩講　小百合園　旭が丘学園　仙台天使園
丘の家子どもホーム　ラ・サールホーム　芙蓉保育園　名谷みどり保育園　愛和会ささやのぞみ保育園　杜の郷
慈生園　清泉女学院　育愛会リズム保育園　鳥取県福祉相談センター　大城保育園　西台こども館
新庄養護学校内「セカンドステップ研究会」

●理事会

渡辺 俊一（理事長）　金子 義男（副理事長）　小山 望　木村 秀　後藤 純　所澤 保孝
宮崎 昭　渡辺 紀久子

●監事

井部 文哉　黒田 隆之

●事務局

渡辺 紀久子（次長）　佐藤 晶子（部長）　六車 佐和子（主任）　阿部 翔太　森 和美　石川 芳子

●資格審査委員会

小山 望（委員長）　井部 文哉　佐藤 秋子　細川 かおり

●職員関係委員会

渡辺 俊一（委員長）　黒田 隆之（副委員長）　井部 文哉　金子 義男　渡辺 紀久子

●親子塾

金子 歌子（秦野）　渡辺 紀久子（代田）　渡辺 紀久子（名古屋）

●指導講師会

宮崎 昭（会長）　木村 秀（副会長）　木村 秀（専任指導講師）

●指導講師

渡辺 紀久子　佐藤 秋子　橘 治利　金子 歌子　木村 秀　宮崎 昭　三好 布生加　本多 映子
村川 京子　米田 薫　宮内 俊一　竹田 文子　マーシャル 理恵子　石川 芳子　田中 浩子　勝村 とも子
田中 淳子

●指導員

島野 正子　石川 愛子　秋田 真澄　松澤 ひろみ　並河 智子　石原 千佳　植村 圭子　川辺 真純
高橋 麗子　林 さおり　味水 智子　荻野 潤子　船水 恭子　山崎 美恵子　松尾 光雄　影山 竜子
櫻井 勝美　矢作 若菜　山崎 尚子　稲葉 史恵　佐藤 治美　佐々木 崇　高橋 信子　中根 芳浩
長谷 範子　石原 絵美　廣岡 綾子　氏江 紀恵　北原 伍　石上 志保　荻野 貴子　菊池 寿子
田上 由香　浜田 貴代　森山 友恵　高橋 仁子　谷本 真由実　玉置 信子　福島 百子　水野 明世
石森 恵美　伊藤 なおみ　林 法子　福井 伸弥　堀 健一　三好 淑子

SEL（社会性と情動の学習）の発展

山形大学 教職研究総合センター教授　宮崎　昭

1. セカンドステップとの出会い

セカンドステップと出会ったのは、2001年3月のアメリカ視察研修でした。シアトルのCFC（Committee for Children）で、Joan Duffell女史の講演を聞き、小学校と中学校での実践を見学しました。21世紀の幕開けで、その年の9月にアメリカの同時多発テロが起きたのでした。

2. NPO法人日本こどものための委員会

日本こどものための委員会は2001年に発足し、第1回研修会がその8月に2日間、10月に2日間、合計4日間行われました。この10年間を振りかえって、そこに一緒に参加して学んだ仲間が、現在は指導講師として活躍しているのを見ると、隔世の感があります。

2005年10月には、指導講師としてシアトルで開かれた国際コンソーシアムに参加しました。CFCの開設者の一人Jennifer Jamesの講演を聞きました。子どもたちがおかれた困難な状況に想いを寄せ、未来の社会を創造するために、大人がなすべき子どもたちへのかかわりに情熱を傾けている姿にうたれました。

3. SEL（社会性と情動の学習）とは

セカンドステップは、ソーシャルスキルトレーニング（SST：Social Skills Training）という心理学理論を基盤として開発されました。これは、共同体の中でお互いに助けあう関係を目指す、対人行動の技能訓練です。しかし、現在は「社会性と情動の学習」（SEL：Social-Emotional Learning）を基盤とするという認識に変わってきています。違いは、「情動」の役割により注目している点です。Daniel Golemanが、こころの知能（EQ：Emotional Quotient）という概念を提出して、「情動」や「人間関係」が人々と組織を動かす重要な要因であることを指摘したのが大きなきっかけでした。これは、P. Salovey & J. D. Mayerが1990年に情動的知能（EI：Emotional Intelligence）としてモデル化したのが始まりとされています。そして、NPO法人CASEL（Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning）が1994年に設立され、「社会性と情動の学習：SEL」の研究と実践を教育の基本として推進しています。その最新の研究では、SELが教科学習の改善にも役立つことが示されました。

4. 本会のこれからの課題

ひとつは、中学生、高校生用のプログラムの開発です。セカンドステップ中学生版は、DVD映像が多く翻訳が難しい構成です。WHOのライフスキル教育などを参考に、日本文化に合わせて独自に開発する必要があるでしょう。

ふたつ目は、日本におけるSEL研究の推進です。昨年、日本心理学会が「IQとEI」と題した公開シンポジウムを開きました。また、自閉症の療育では体験共有や情動の共有によって自閉的な特徴をいちじるしく緩和する、RDIやDIRなどの指導法が実証されています。予防だけでなく治療的効果の検討も必要です。

みっつ目は、国際的な役割です。貧富の差や宗教の違いを乗りこえて、相互に理解しあうには、SELによる「こころの知能」の教育を世界に普及することが必要です。そのためには最貧国においても使える教材やプログラムの工夫と人材の交流・連携が必要となります。

本会のこうした努力が実を結び、世界平和の一助となることを心より願っています。

専任指導講師として、研修会を行う中で気付いたこと

東京都勝山学園 心理技術員　木村　秀

1. セカンドステップの課題

専任指導講師となってから、数えきれないほど研修会をしてきましたが、研修会に参加される多くの人が、セカンドステップというプログラムの良さを実感されていると思います。その一方で、このセカンドステップに関して、レッスンを行う難しさや、実践する場所や時間の確保など、様々な課題が浮かび上がってきています。

2. セカンドステップ実践の課題

研修会を受講する必要なく、教材を買い求めることができた時に、このプログラムが広まっていくスピードは加速されるだろうと思います。一方で、適切な使い方をされなければ、効果のないプログラムだという風評も広がりかねないと思います。研修会を受講された人であれば、レッスンを行う時の細かなテクニックや教材に散りばめられたセカンドステップの理念、ロールプレイの大切さなど、これらのことを研修会なしに教材の中身だけを読んで理解していくのは困難だと、すぐに理解していただけると思います。

次に、レッスンを実施する時間や場所の確保の難しさについてですが、多くの場合、実践場所における周囲の大人の理解や協力を得ることの難しさや、レッスンの時間の確保が大きな課題になってくると思います。セカンドステップが公式なものとして、授業のカリキュラムに組み込まれたりすると実践しやすくなりますが、多くの人はそのような環境下で実践されていないのが現状です。では、どうして実践し続けられるのかという話になりますが、実際のところは論より証拠という話で、セカンドステップのレッスンを受けた子ども達の様子が変化し、それを見た周囲の見る目が変わっていくことになり、実践し続けられる環境になっているのだと思います。

実際のレッスンを実施する難しさについてですが、実践者の上手、下手は、きっとあると思いますが、目の前のこどもについての理解は、指導講師や指導員などよりも、レッスンの実践者が一番よくわかっていると思います。レッスン自体はカードの裏の文章の流れに沿ってやっていくだけでも、進めていくことができ、誰がやってもある程度の効果をあげられるのがプログラムの良さですし、セカンドステップはプログラムがカッチリしているので、大きな失敗をすることが少なく、実践を積み重ねるのが上手になる早道だと思います。

3. 課題解決に向けて

実践している中で困った時にどうしたらよいかということで、事務局へ電話やメールをくださる人も多くいます。困っているときは、聞くのが大事ですね。また、研修会のボランティアスタッフやファシリテーターを引き受けてくださった人は、自分が勉強になりましたと言って帰っていく人がたくさんいます。困った時は、もう一度習うのも一番だと思います。

以上、研修会を通して感じてきたことを述べさせてもらいました。これからの10年のあいだにセカンドステップというプログラムが進むべき道は、試行錯誤の連続だと思います。

でも、困った時は、「問題解決のステップ」を使って、うまくいかなかったら、次は何ができるか？なんどでも挑戦すればいいと思います。

セカンドステップと文化的適応

認定心理士、保護司　**渡辺 紀久子**

1. 文化的適応の義務づけ

セカンドステップ教材は、アメリカの文化・社会の中で使われることを前提に開発されています。翻訳にあたって、その前提と異なる場合には、食い違いを調整すること、つまり「文化的適応（cultural adaptation）」が義務づけられています。

私たちは、この点に十分な注意をはらって翻訳しました。たとえば「チェス」を「オセロ」に変えたり、「腕組みをして頼みごとをする少女の写真」を「低姿勢なもの」に変えたりしました。しかし、これらはむしろ小さな調整にすぎません。

2. アメリカ側の内容に適応

問題は、教材の内容が「日本の文化習慣とは大きく異っているが、優れている」場合です。私たちは、その食いちがいを日本側にあわせるより、むしろアメリカ側の内容を受けいれるべきだと考えました。以下に4例をあげます。

コース1「交換する」のレッスンでは、親が子どもにモノを買いあたえるとき、あとで他の子と交換できるものを選ぶよう強調しています。しかし日本では、子ども同士でモノを交換することは煩わしいとして、一人の子どもに玩具をいくつも買いあたえています。しかし教材は「対人交渉」の大切さを教え、結果として「省エネ」にもつながる大きな視野をもっています。「このレッスンは必要ない」との意見もありましたが、交渉の大切さを幼少のころから教えておくと、将来、国際社会にでたときに、相手の言うなりにならずに済むのではないかと考え、あえて削除しませんでした。

コース4「不満を伝える」では、落ちついて（3回深呼吸する等）背筋をのばし相手をまっすぐに見て、自分の考えをはっきりと伝えます。おだやかに率直に話すと、よい結果がえられることを強調しています。しかし日本では「先生に面とむかって不満をつたえれば、内申書にひびく」と恐れてがまんするケースが多いようです。子どもの弱みを握るのではなく、話しやすい雰囲気をつくることの大切さを、とくに先生方は、このレッスンから学んでいただきたいと思います。

コース5「いじめられたとき」では、まず落ちついて、その人に係わらないようにします。うまくいかなければ、はっきりと「やめて」と言います。自分の気持ちを「アイ・メッセージ（“I” message）」として伝えたうえで話題を変えます。それでもいじめが続いたら、大人に助けをもとめること等を指導します。しかしわが国では感情表現の苦手な子どもが多く、不登校や自殺に追いやられるケースが後をたちません。事前にいじめの対処法を学んでおけば、多くの悲劇を避けられるのではないでしょうか。

コース4「盗みたくなったとき」「ウソをつきたくなったとき」では、短期的な利益と長期的な信頼の損失をよく考えながら比べて、小さな失敗でも大きな失敗と同様に信頼関係を失うことを学ぶ内容となっています。

この他にも「仲間に押しつけられたとき」「失望したとき」など、いま日本の子どもが必要とするレッスンが数多く盛り込まれています。

3. 新しい文化習慣の創造

このようにセカンドステップは、ある意味で、既往文化への問いかけ・挑戦であり、新しい文化習慣の創造につながる機会を与えています。子どもが人生のもっとも大切な基礎を楽しく学ぶ「平和づくりの教材」です。日本はいうまでもなく、戦火の絶えない国々でも使われることを心から願っています。そして、世界中の子どもたちが同じ唄を歌い、同じ人形劇をみる日がくることを夢みています。

みんなに届けたいセカンドステップ

山形県河北町立谷地中部小学校 教諭　竹田 文子

1. 今年度の実践

小学校において、実践を続けて9年になります。

今年度は、特別支援学級担任2名の仲間とともに、コース1を行うことにしました。担当している子どもたち8名は、どの子も軽度から中度の知的障害がありますが、人とかかわることを喜び、自分なりの表現でコミュニケーションをとろうとする子どもたちです。子どもたちを見ていると、自分の気持ちをことばで表現できない、行動のコントロールができない、場の雰囲気や暗黙のルールなどが読み取れない、友達に一方的に関わってしまう等の様子がみられます。そのため、集団行動が苦手で、人間関係でトラブルを起こしやすい状態になっています。

そこで、よりよい人間関係を作ることができるように、自分の気持ちをことばで伝えることができ、自分の気持ちをコントロールする方法を知り、具体的な行動の仕方を学ぶための学習が必要と考えました。セカンドステップは、それらをスモールステップで系統的に学べる教材として最適です。ソーシャルスキルが育つための道筋に沿って組み立てられており、子どもの社会的・情動的能力を高め、衝動性や攻撃性を和らげることを目的に作られた優れた教育プログラムであるからです。

2. 実践の評価

今回の実践に際し、セカンドステップ実施直前（5月）と終了後（1月）に「学校における社会的行動の尺度」を使い、評定してみました。全員が、社会的能力が高まり、反社会的行動が著しく減少していました。

自閉症のA君は、いつもパニックに苦しんでいましたが、言葉が言えるようになり、パニックになる前に落ちつくことができるようになりました。落ち着くステップの「5まで数える」が気に入って、マイブームになった子もいます。

また、いつも言いたいことがあっても、体を硬くして、話せなくなるBちゃんは、ロールプレイで何度も前に出て演じているうちに、固まる回数が減り、固まっても、まもなく立ち直り、自分の気持ちが言えるようになりました。言葉のないCちゃんは、写真の子どもたちの表情やからだを上手にまねして、ジェスチャーで気持ちを伝える力がつきました。人前では、いつも受身だったDちゃんは、ブレーンストーミングを経験してからは、自信をもって自分の考えを発表できるようになりました。

3. 特別支援教育への適用の必要性

生活場面でトラブルの多い子や、学習場面ではあまり活躍が見られない子が、セカンドステップの時には、積極的に発言し、参加する姿を多くみてきました。私は、そのことを「不思議」と表現していましたが、最近、理由がわかったような気がします。セカンドステップを必要としている子が積極的になるのは当然です。トラブルの多い子は「何とかしたい」と思っているのです。「友達と仲良くする方法を誰よりも知りたい」と思っているのです。

また、これまで、知的障害のある子どもたちは、話しあうのが難しいと感じていました。でも今は、話しあうことは、決して難しくはないと思っています。子どもたちの誰かが言った意見を、話しあいの途中で、指導者がロールプレイして見せたり、子ども同士でさせたりしながら、その子の考えていることを補うようにしました。すると、話しあいが成り立つようになりました。

4. 絵本の効用

毎回レッスンのまとめに、村川先生紹介の絵本を読み聞かせるようにしました。絵本の効果は絶大でした。レッスンが進むにつれて、ことばをイメージしながら聞くようになり、全員が、共感しながら、絵本の世界にひたるようになっていきました。

そして何よりも、実践している私たちが、子どもたちとのやり取りを本当に楽しんでいます。

10周年記念座談会／理事編

この10年を振り返って

2011年2月6日開催

渡辺 俊一

東京理科大学理工学部
建築学科 嘱託教授
本会理事長

井部 文哉

元法務省職員
本会監事

黒田 隆之

ClorDiSys Solutions, Inc.
東京連絡事務所長
本会監事

和氣 正典

東京都品川区教育委員会
小中一貫教育担当課長

金子 義男

若木保育園（神奈川県秦野市）
園長
本会副理事長

日本の多くのNPOは、人材や資金的のリソースが少なく、余裕がないのが現状です。しかし、本会は「これからどのように展開していこうか」と自由に悩める、贅沢な状況にあります。これまでの10年間は、結果的に見れば面白い展開をしてきたと思います。この座談会では、理事の方々にお集まりいただき、そのあたりを振り返りつつ、これからの10年を考えてみました。

トレーニングを通して身につく、それがセカンドステップの魅力

■渡辺　まず本日のゲストである品川区の教育委員会事務局の和氣さんから、外から見たセカンドステップについて、お話を頂きたいと思います。

■和氣　私は品川区で、「市民科」という新しい教科をつくるプロジェクトに取り組んでいました。今の子どもたちは、基本的なコミュニケーション能力が決定的に弱いのです。また社会に対する無関心、自分の感情をコントロールできない子どもが増えています。学校教育の現場で「道徳」

などの形ではやっているはずなのですが、全くないがしろにされていて実効性がない。また家庭にも「家庭力」がないわけですから、そういう中で子どもが人間として大切なものごとを教わらないで育ってしまう。挨拶もできない子ども、会話もできない子どもが育ってしまう。

そこをなんとかしないといけない、と思いました。これまでは学校は「こういうことは、本来家庭教育でやるべきことだ」と言って、家庭に任せ、一方で家庭は「それは学校がやるべきではないか」と相互に責任を転嫁する構図がありました。その繰り返しの中で、置きざりにされたのは子どもたちです。それで市民科をつくっているときに、たまたま友人から「セカンドステップという面白いプログラムがあるよ」と聞いたのです。「市民科をつくるなら、参考にしたらどうか」ということで、ビデオを借りて見させていただいたのが最初です。

■渡辺　セカンドステップの魅力は、どこだと思いますか？

■和氣　いちばん最初に衝撃を受けたのは、「怒っていい」と教えているんです。これはいままでの日本の教育ではなかった。日本では、どちらかというと我慢して、じっと我慢して爆発する、という印象です。しかし「怒っていいんだ」と。「怒るのは自然のことなんだよ」と素直に教える。問題は「それをどうコントロールするかだ」と教える。ここの切り口がとてもいいと思ったんです。こういうことをシッカリやっていかないといけない。

怒りや感情をコントロールするプログラムはよく見かけるのですが、これだけ体系的にやる、さらにロールプレイをとおして実際に訓練させて身につけさせる、というのはあまりないですね。この考え方は、品川区が取り組んでいる市民科と同じ方向なんですね。スキルはトレーニングしなければ身につかない。頭で考える機会だけを与えるのではなく、それを訓練してみる。そこが魅力ですね。

■金子　私は保育園を経営しております。本会の最大の魅力は、「セカンドステップが良いプログラムだから導入しよう」とか「これは素晴らしいから、みんなに紹介しよう」ということではないことですね。渡辺紀久子先生が、スクール・カウンセラーとして子どもたちと向き合い、実際の苦しみのなかで「何とかしたい」と始まった、そういう精神は10年たった今でも生きていると思います。

明治以降の日本の子育てというのは、「しつけ」が最大の課題だったんですね。「しつけ」というのは、基本的には大人の社会に「大人が気に入るような子どもになって欲しい」ということです。それだと、大人が気に入らないことは、みな「悪い」ことなわけです。私はそれはおかしいと思い、そうではない保育活動をしようと思っていました。そこで最初は、われわれの保育活動を補強できるプログラムのようだなと思って、参加させてもらったのです。

「親子塾」をはじめ、日本独自の発想が支えた本会の成長

■井部　私のもともとの仕事は非行少年、犯罪者の関係をいろいろやっていたものですから、セカンドステップは非常に良いと分かりました。まだ研修システムも整っていない模索時代に、研修会で暴力についての講義をしたのが始まりでした。

私は子育ての問題でも、「地域社会での犯罪・非行の防止は、どういうことが必要か」と気にしています。仕事や地域づくりの関係から、いろいろな非行少年に関わってきましたが、一般の社会ではやはり子育ての基礎づくりとして、子どもだけでなく親子の問題をいかに解決するか、が大事だと思います。そういう点では「親子塾」は、と

ても良いシステムですね。私は親子塾をNPO活動から、さらに地域社会へ引きのばしていくのがよい、と思っています。

■金子　親子塾を7年くらい続けています。一般公募した親子10組ですけど、親子塾に参加しようとする方は、問題を抱えたお子さん、子育てに困難を感じている親御さんなんですね。「この子がよくなれば」「聞き分けがよくなれば」「行動を改めれば」ということが多いのです。ところが4～5回通っていると、「この子のためじゃなく、私のためだった」と、親御さんたちがそういう印象をもちます。子どもを対象にして、というよりも、子どもが参加するとき一緒に付いてくる親御さんたちが、どうレッスンを受けていくかがひとつの狙い目ではないのか、という気がします。

■渡辺　アメリカのCFCが、このセカンドステップを開発したわけですが、アメリカには親子塾はないんです。日本の最大の「発明」が親子塾です。

日本のNPOの歴史はまだ短いのですが、その中で本会はかなり順調に成長をしてきた、と思います。例えば「会員制」ですね。アメリカは会員制ではないのです。設立当初に、いろいろ議論した結果、「われわれは家元制度でも、学会でも企業でもなく、市民活動としてセカンドステップを普及する」と定めました。「多くの教育機関職員や市民ボランティアがセカンドステップを現場で実践する、それを本部で集中的に支援し交流を図る、その全員が市民活動団体の会員としてやっていく」という方式にしたわけです。会員にならなければ研修会の受講ができないし、受講しなければセカンドステップが実践できない、と一連の縛りをかけたわけです。

この他にも、研修会や講演会の講師になる会員をしっかりと選ぶ「資格審査制度」とか、研修会の講師を補佐するための「ファシリテーター制度」とか、実践のレベルを保つために受講者にしか教材を売らない「教材頒布制限制度」とか、アメリカにはない各種の工夫を施してあります。やはりいちばん違う点は、研修会受講料を主な収入源としている点です。日本では収入の過半になっていますが、アメリカでは教材売上が9割です。日本独自という意味では、黒田さんいかがですか？

■黒田　私は、成長期のころから参加しました。アメリカのCFCの欠点のところを、本会は、日本流にアレンジし非常に上手くやっていると思いますね。全米でこれを展開するには大変な経費がいるし、そのための人員の確保というのも大変です。だから結果的には、次から次に新しい教材プログラムを出版していくという経営スタイルです。アメリカから日本に入ったいろいろな製品がそうであるように、非常に細かく丁寧に、かつ使う側の立場にたって運営していくというのが、日本流なんです。そういう観点にたつと、親子塾ができたのは典型的な展開だと思います。

また、非営利組織の基本というのは、「ある収入が得られたとしたら、それを次期の投資に向けていく」のが本来です。事務局の職員にとって、企業であれば、成果を上げれば報酬や地位が上がる、という直接的なリターンがあります。しかしNPOで、それをどう実現していくのかは難しい課題です。給料を上げることはやぶさかではありませんが、NPOの本質とは外れています。たとえば職員が、実際に子どもと接する機会や、本場シアトルに行けるような機会をつくってあげるとか、お金の報酬ではないところで「参加してよかったな」という仕組みが、組織運営には必要ですね。また「事務局がしっかりするから、指導講師の先生方もしっかりと安心してできる」という関係では、本会はまだ弱い所があるように思います。

■渡辺　研修会・講演会の講師について言うと、

CFCでは専従の講師がいて、全国を飛び回っています。本会では「誰でも、研修会を受けて実践をへたら研修員の資格審査を受けられる、研修員として実績をあげると、理事会のすすめで指導講師の資格審査を受ける、この指導講師だけが研修会・講演会の講師になれる」という段階的なやり方です。これは会員のなかから優秀な人材を育てる、よい仕組みになっていると思います。

CFCでは技術面をとても重視していますが、本会もそうです。指導講師は、大学でいえば教授会にあたる「指導講師会」をつくって、本会の技術面を担うのです。そして経営は理事会、技術は指導講師会と権力分散しています。指導講師会の先には、いずれSEL（ソーシャル・エモーショナル・スキル）の学会設立へむけて、2年前にSEL研究会が設立されました。

■金子　当初は指導講師の資格を持つ人がいなくて、03年と04年にCFCのローリー先生に2回来てもらい、研修会講師をやってもらいました。そのころ受講した人たちが今、指導講師になっていますね。研修会で難題なのは、指導講師がいつも確保できるかということだと思います。木村先生に専任指導講師をお願いしてかなり苦労をおかけしていますが、組織発展のためにも人数を確保する必要があると思います。またできれば、常勤で専任指導講師になる方が増えてくればありがたいなと思いますね。

セカンドステップ理念の共有が、公教育への展開への鍵

■渡辺　公教育への展開という点では、日本では、ご承知のように、1,700の市区町村のうち品川区だけです。セカンドステップは、なかなか公教育へ入れないので、保育園、児童相談所、児童養護施設など、日本ではアメリカとぜんぜん違う方面に迂回しました。とくに児童養護施設では、親に虐待された子どもにとって、セカンドステップの効果が非常に大きいと報告されています。これから全国に向けてもっと広めていかなければ、と思っています。

アメリカは、公教育への進出自体は、市場がそろそろ頭打ちに近づいている点を除けば、あまり苦労がない、と聞いています。イギリスや北欧では、政府がとても理解があるため、いきなり年間1,000万円とかの公費で始めてしまうけど、担当者が代わったり、政府の政策が変わったりすると、とたんに激減するという問題がある、とも聞いています。

■和氣　どこの自治体もそうだと思いますが、実際に効果を検証しつつやること、そして本来の意図を先生が理解してやること、が重要だと思います。安易に取り入れて何も理解できていない状態で始めても「話が違うじゃないか」となりかねません。自治体も導入するときに、どんなふうに使うのかとか、どんな目的でやるのか、しっかり考える必要があります。要するに、魂の入った形でやっていただかないといけない。

セカンドステップが広まれば広まるほど、いろいろな課題が生まれてくる可能性もあるので、この点は注意していく必要があると思います。品川区はまだまだ、やっと小学校に入れたところで、まだまだ研究すべきことは沢山あるのかな、という気はしています。

■井部　学校へ広めていく場合、「セカンドステップの理念をどのように皆で共有するか」という話があります。セカンドステップの目的には、技術的なことを教えるほかに、学校や地域の風土を、このセカンドステップで作っていくと、書いてあります。この辺りが今後、広めていくうえで重大なポイントだと思います。

セカンドステップのガイドブックの翻訳をして

いて分かったのは、どうやって地域のボスや教育委員会を説得するか、が論じてある。アメリカの場合は、教育委員会は地域でつくっていますから、どうやって地域から資金的な援助を得るかとかを非常に強調しています。日本は逆で、こんなことやらなくても、教育委員会にお願いして納得してもらえればできてしまうので、アメリカのようなその地域に根ざした風土の醸成ができないですね。

■和氣　おっしゃる通りだと思います。私どもは、「こういう子どもを育てたい」「学校教育の弱い部分について、こうしたい」という思いがあったから、セカンドステップを導入しました。ただスキルだけ学ぶというのは、本末転倒です。「品川区は何のためにやるか」がはっきりしています。そういう、目的が大きくぶれない風土をつくることが、大切ではないでしょうか。

セカンドステップをやることによって、どんな社会をつくりたいか。どんな人間関係を目指しているのか。どういう人間関係になってほしいのか。暴力によらないで、話しあいで解決しようとする。おたがいに譲歩するところは譲歩する。そういう態度をとれるようになってほしいとか、何をしたいかを明確にしていかなければいけない。

公教育でとり入れる場合、やりたくない教員にもやらせる、という意味あいが含まれます。そのとき、われわれの理念や使命をどれだけ教員にしっかり伝えられるかが問われます。ですからこの点を、研修会ではぜひ強調してほしいですね。

■渡辺　幼稚園・保育園への導入という点では、どうでしょうか？　幼稚園・保育園生から高校生くらいまでを、体系的に支えていきたいと思うのですが。

■和氣　セカンドステップを導入している立場としては、幼稚園・保育園から入れたい、という思いがあります。幼稚園・保育園で1年、2年のプログラムがあり、その先に品川区独自の市民科というプログラムがありますから、これをずっと繋げていくことが重要だと思っています。そういうところから、公教育においてとり入れやすい方法と体制を考えていくことが必要だろうと思いますね。

■金子　保育園関係の人たちは、研修会にかなり参加しているんです。でも幼稚園はほとんど参加がない、という問題がありますね。これは不思議です。幼稚園は公立も民間もあるわけですけれども、両方ともあまり参加されていません。保育園は公立も民間も意外と参加しているんですが。

■和氣　「小１プロブレム」というのが、いま話題になっていますから、それにも対応できることは、キチンと強調したほうがいいんじゃないでしょうか。幼稚園や保育園でキチンとセカンドステップを学び、小学校に上がっていくというストーリーであれば、伝わりやすいかもしれませんね。

■渡辺　こういう話をききました。幼稚園へは勉強のためにいい子がくる。だから幼稚園は荒れていないから、セカンドステップは要らないというんですね。「セカンドステップは、悪い子のいるところには効果があるけれども、良い子のところは効果がないんじゃないか」と（笑）。全然違いますよ、と言いたい。アメリカでは「EQとIQは密接に関連している」という話がありますが、「セカンドステップはEQを育てるんですよ」と言いたいですね。

■金子　日本では「いい子」とは、頭のいい子、親にとっていい子ということになります。しかし、子どもにとっては何が「いい」のか、それを考えないといけないですね。

本会のさらなる発展に向けて

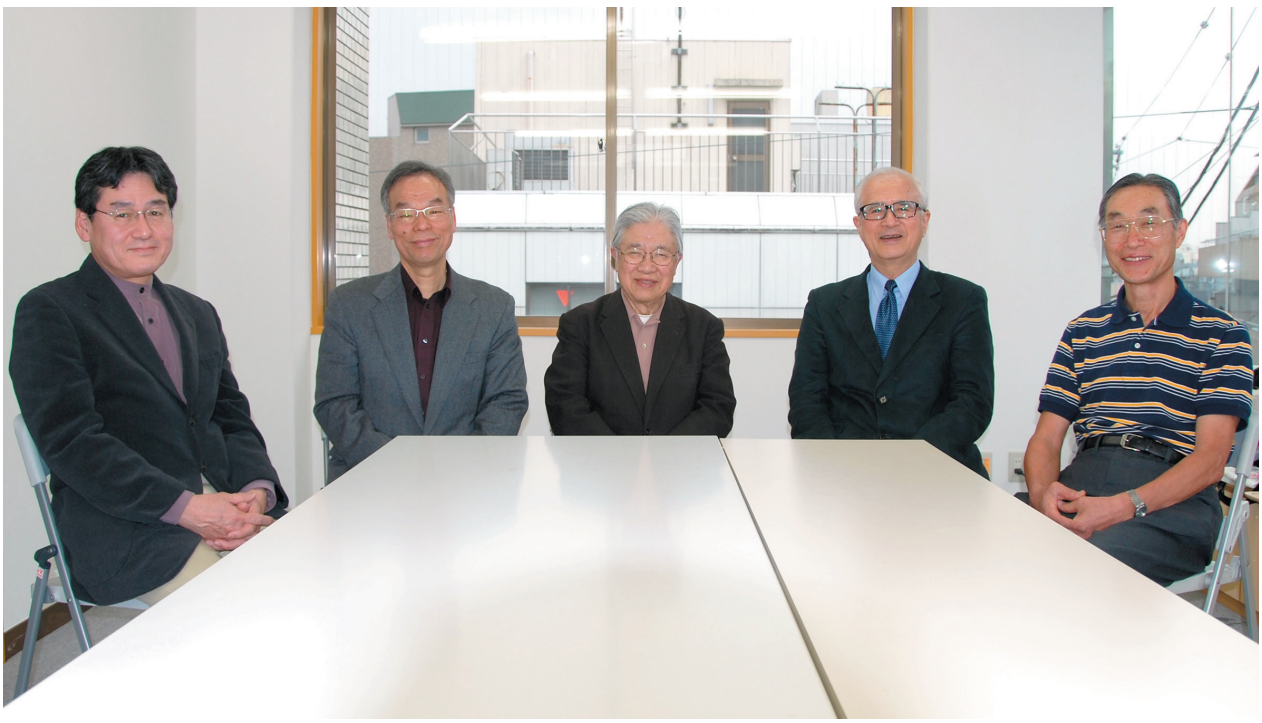
■渡辺　本会は現在、年間予算4,000万円規模で運営していますが、今後ますます成長を遂げてゆくことが見込まれます。10年以内に1億円規模になるかもしれません。その頃には、そうとう本格的な組織形態になっている必要があります。いま、その段階で中心となる人材をさがし育てて、体制を整備しているところです。また、組織が整った段階では、理念をさらに磨いていくことが大切ですね。そのための基礎を今つくっているんだな、と感じています。われわれの志は高く、日本一のNPOを作ることです。

いまは、東京の事務所を中心に活動を集中しているのですが、地方に拠点をつくることで分権化したりして、会員がたがいに交流できるような「量から質へ」の体制も進めていきたいですね。国内での充実ということでは、親子塾の全国展開など、いろいろあると思います。

その次は、国際交流ですね。とくにアジアの近隣諸国です。子どもたちのために働いている在日組織の方には、無料で研修会を受講していただく制度も整えました。日本でセカンドステップの良さを分かった方が「母国でも普及させたい」ということになれば、支援をしたい、とも考えています。そういう方が多くできた段階で、セカンドステップの国際会議を日本で開くのが、ひとつの夢でもあります。

■黒田　元々がアメリカからスタートしたプログラムですから、必然的に海外との接点は避けて通れないところがあります。もちろん米国のCFCというライセンス先そのものの経営上の問題もあります。CFCは、日本型のプログラムの運営の仕方にかなり興味をもっていると思います。日本の中で日本風に味付けしたものが、たぶん米国オリジナルのものを持っていくよりも、アジアには受け入れられやすいと思います。

■渡辺　夢が広がりますね。ありがとうございました。



会員からのメッセージ

北海道
荻野 貴子
●情緒短期治療施設

当施設では2007年の導入から施設内児童への実施が5年目となりました。グループ人数の試行錯誤・副教材やウォーミングアップの工夫・場所を施設内から併設校への変更など様々な検討が加えられ今日に至っています。

伊藤美佳子
●保育園

学習を通して相手の気持ちを考えたり、自分の思いを順序だてて伝えようとするこどもの姿が少しずつ見られるようになりました。今後も日常生活の中で、スキルを活用できるよう保護者との連携のあり方を探りながら、支援していきたいと思います。

岩手
福島智恵子
●保育園

この10年で、200人以上の子ども達がスキルを身につけて卒園していきました。今後もより良い人間関係の築きを目指していきたいと思います。

秋田
味水智子
●保育園

一粒の種が今はたくさんの実を結んでいます。しっかりと大地に根付く種まきを続けていきたいと思います。

山形
伊藤なおみ
●親子塾

祝10周年。セカンドステップとの出会いに感謝!

茨城
高橋麗子

親子塾やっと希望の戸が開き～祝研修会

千葉
石原知佳

友や学生と6年間柏市子ども教室での実践でLDの子どもにも接し公教育での普及を願うようになりました。

東京
太田喜乃
●小学校

実践を子ども達が毎回楽しみにしてくれているので、私自身、幸せをもらえています。子どもや先生が学ぶことで、各家庭にも影響を与え、その子ども達が作る社会がより良いものになってほしいと思います。

神奈川
鍋島祐美子
●小学校

様々な生き方や価値観が交差する現代、子どものみならず、日本の多くの人が朗らかに生活するためのきっかけとしてセカンドステップに出会うことができるように願っています。

新潟
杉坂芳文
●養護学校

祝10周年。今後ますます全国に広がることを祈念しています。

長野
福島百子
●NPO

セカンドステップは、子ども達にとって人生の指標です。出会えたことに感謝しながら、レッスンを行っています。

静岡
北沢道子
●保育園

子どもたちが、自分でケンカなどのトラブルを解決できるようになったり、自分の気持ちを言葉で言えるようになったり、落ちつくステップを自分からやったりするのを見ると、セカンドステップをやっていて良かったなあと思います。

愛知
水野明世
●子育て講座

子育て、自分育てに大切なセカンドステップからの気づきに感謝しております。

兵庫
大川晴司
●保育園

相手の気持ちを考える、周りのことを思いやるといった心が育っていっていると感じています。今後ももっともっと人の心が分かる子に育ってほしいです。

広島
山崎美恵子
●児童養護施設

カードを使いながら「ブランコを代わってあげないと言われたらどんな気持ちかなぁ?」との質問には、『殴ってやりたいが、我慢すると思う』と答えた。子ども達から出てくる言葉にレッスンの成果を感じています。

山口
廣岡逸樹
●児童養護施設

当施設で導入してから2年半経ちました。小学校低学年、中学生のほか、集団だけではなく、個別でも「感情のコントロール」を中学生に実施しています。今後も実施できる職員を増やしていこうと考えています。

高知
浜田貴代
●保育所

セカンドステップは課題が多い支援の必要なこどもをはじめ、すべてのこどものためのプログラムだと思います。

熊本
前田たか子
●小学校

大人（親）も人間関係に悩む時代、セカンドステップに救われた子どもたちも多いと思います。

●編集後記●

本誌校了間際の3月11日に東日本大震災が発生しました。被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。復興のためには我々一人ひとりが出来ることを出来る範囲で持続的に協力していくことが大切です。いまこそ本会の使命と技術力が試される時です。（後藤）

CONTENTS

発刊の挨拶 ……2
10周年を迎えて ……3
10周年記念座談会／指導講師編 ……4
日本こどものための委員会　小史 ……9
年 表 ……17
成長の記録 ……18
事業内容 ……19
組織人事 ……20
10周年記念「研究論文」 ……21
10周年記念座談会／理事編 ……25
会員からのメッセージ ……31

10年のあゆみ ―創立10周年記念誌―

2011年3月31日発行

編 集 人　後藤　純

発 行 人　渡辺 俊一

発 行 所　NPO法人 日本こどものための委員会
〒156-0043　東京都世田谷区松原5-2-6-3E　TEL 03-5329-1461／FAX 03-5329-1491
E-mail：renraku@cfc-j.org　Web：http://www.cfc-j.org/

編集協力　株式会社 出版文化社